

ピア・フィードバックを活用した 英語パラグラフ・ライティングの指導

— 受講生による授業評価アンケートの結果を中心に —

鬼 田 崇 作

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

本稿の目的は、2013年度後期のコミュニケーションIIAにおいて、筆者が行った英語パラグラフ・ライティングの授業実践を報告することである。英語ライティングの授業においては、多くの学生は教員による添削を希望するが、教員の立場からは、様々な制約の中、全ての学生のプロダクトに対して、細部まで十分な添削を行うことは難しい。そこで、教員による添削を補完するために、学生同士が互いのライティング・プロダクトを添削し合うピア・フィードバックを活用する授業を行った。本稿では、実践の内容を記述し、主に学生による授業評価アンケートの結果を通して、実践の効果を考察し、今後の課題を述べることとする。

2. コミュニケーションIIAの概要

コミュニケーションIIAの共通シラバスでは、授業の目的は以下のように記されている（下線は筆者による）。

自分が知っていることについて、文法的に正しい文を書き、それらを適切につなぐことで、まとまりのあるパラグラフを英語で作成する力をつける。また、読み手の社会的・文化的背景を意識して、自分の伝えたい考えや主張等を英語で表現する力を養う。

このように、コミュニケーションIIAクラスの主目的は、英語のパラグラフ・ライティングの力を養成することである。そこで、本実践においては、英語のパラグラフ・ライティング力の養成を主目的とし、その上で、ピア・フィードバックを導入することにより、受講生の英語ライティング力の向上を図ることとする。

3. 実 践

本稿で報告する実践は、2013年度後期に筆者が担当した4つのコミュニケーションIIA授業である。4つのクラスは学部、受講者数、英語習熟度などが異なるが、全て同じ教科書を用いて、基本的には同じ内容の実践であった。以下、実践の概要を記す。

3.1. 各クラスの概要

筆者が担当した4クラスにおける受講生の英語力は表1にまとめられる。

表1 各クラスの11月時点における TOEIC IP テストの結果

	平均値	標準偏差	最小値	最大値
工学部 (n = 30)	420.89	68.92	210	530
教育学部 (n = 26)	441.84	82.94	185	575
法学部 (n = 20)	460.71	89.09	255	600
理学部・生物生産学部 (n = 27)	596.30	66.34	510	855

3.2. 使用教科書の概略

本実践においては、シラバスに示される授業目的を達成するため、教科書として『Get Your Message Across: Writing Communicative Paragraphs』（神保尚武，ケイト・エルウッド，森田彰，渡辺洋一，山田茂，レオニード・ヨッフエ）を採用することとした。この教科書は、英語でパラグラフを書く際に、Time Order や Cause and Effect など、種々のテーマに応じて文章の書き方がどのように異なるかを示し、それらのテーマについてパラグラフ・ライティングをうまく達成できるように編集されている。教科書の内容は表2の通りである。

各章においては、それぞれの章の内容を表すパラグラフが載せられており、そのパラグラフについての問題が配置されている。例えば、第4章Time Orderにおいては、時間関係を示す語句(First, Next, Finally など)を用いて、パラグラフ内の空所を補充する問題や、パラグラフ内に描写される出来事について、それらが起った順番に並び替える問題などが示されている。また、第7章Cause and Effectにおいては、原因や結果を表す語句を用いて文章を完成させる問題や、パラグラフ内の出来事が起った原因を指摘する問題などが示されている。このように、それぞれの章においては、当該の章の内容に応じて複数のパラグラフと問題が配置され、その問題を解くことにより、各章の内容を表すパラグラフを書く能力が自然と付くような工夫がなされている。

表2 本実践で用いられた教科書の構成

章	内 容
Writing Guide	書式と句読法
1	What is a Paragraph? パラグラフとは？
2	The Topic Sentence 主題文とは？
3	Supporting Sentences 支持文とは？
4	Time Order 時間の順序
5	Space Order 空間の順序
6	Process and Direction 過程・手順と指示
7	Cause and Effect 因果関係による展開
8	Examples 例示による展開
9	Definition 定義による展開
10	Classification 分類による展開
11	Comparison and Contrast 比較・対象による展開
12	Review まとめと復習
13	From a Paragraph to a Short Essay パラグラフから小論文へ

3.3. セメスターの計画

本実践の計画は表3の通りである。

表3 セメスターにおける本実践の授業概要

	主な内容	単語テスト	課題
第1回	オリエンテーション, プレ・テスト		
第2回	Writing Guide, MS Word・Googleの使い方	b11	
第3回	Chapter 1 What is a Paragraph?	b12	
第4回	Chapter 2 The Topic Sentence	b13	
第5回	Chapter 3 Supporting Sentences	b11-b13	
第6回	Chapter 4 Time Order	b14	
第7回	Chapter 5 Space Order	b15	課題1 提出
第8回	Chapter 6 Process and Direction	b16	課題2 提出
第9回	Chapter 7 Cause and Effect	b14-b16	課題3 提出
第10回	Chapter 8 Examples	b17	課題4 提出
第11回	Chapter 9 Definition	b18	課題5 提出
第12回	Chapter 10 Classification	b19	課題6 提出
第13回	Chapter 11 Comparison and Contrast	b20	課題7 提出
第14回	E-mail Writing	b17-b20	課題8 提出
第15回	ポスト・テスト, 授業評価アンケート	b11-b20	学期末課題第1稿提出

第1回授業では、授業概要の説明のためのオリエンテーションとライティングのプレ・テストを行った。テストは、受講生の実力診断も兼ねており、TOEFLテスト形式のアーギュメンタティブエッセイを書く課題であった。テーマは、アーギュメンタティブエッセイでよく問われるようなものとし、本実践においては、「高校生は制服を着るべきか否か」というテーマでテストを行った。テスト時間は30分、目安は200単語とし、MicrosoftのWordでライティングを行った。また、辞書の使用、インターネットの閲覧などは禁止した。

第2回授業では、教科書の内容としてはWriting Guideという章を扱った。これは、第1章以降に展開される具体的な英語パラグラフ・ライティングの基礎として、ワープロソフトにおけるフォントやフォントサイズ、行間の設定方法や、句読法 (punctuation) の使い方など、英文を書く際の基礎を簡単に解説する章である。本実践においては、MicrosoftのWordを用いることから、Wordの基本的な使い方を紹介した。また、英文の推敲を行うために、Google検索が利用できることを紹介した。具体的には、“ ”を用いたフレーズ検索、*を用いたワイルドカード検索、site:edu, site:gov, site:cnn.comなどのドメインの指定方法を説明し、英文の誤りを訂正したり、候補となる複数の表現の中から、より自然な表現を選択したりする演習を行った。

第3回授業から第5回授業では、英語パラグラフ・ライティングの基礎を扱った。第3回授業では、パラグラフの構成要素として、主題文 (topic sentence)、支持文 (supporting sentences)、結論文 (concluding sentence) が挙げられることを示し、第1回授業で実施したプレ・テストにおいて、これらの要素が含まれたパラグラフが書かれているかを確認した。主題文の書き方としては、パラグラフの冒頭に示され、どの文が主題文なのかが読者にとって明快である必要があるこ

とを示した。また、主題文の内容は、そのパラグラフ全体の内容を適切に表現する必要があり、内容が広すぎても狭すぎても不適切であることを説明した¹⁾。また、第2回授業では主題文、第3回授業では支持文に焦点を絞り、それぞれの効果的な書き方を扱った。特に、支持文が展開する内容の階層性が明確であり、複数の内容を扱う場合は、その内容が相互排他的である必要性を示した²⁾。

第6回授業から第13回授業までは、毎週、教科書に扱われる種々のテーマを扱い、テーマが異なることで英文の書き方がどのように異なるのかを示した。

第14回授業では、教科書の内容とは異なり、英語によるE-mailの書き方を扱った。この理由は、教科書には扱われていないものの、実生活においては英語でE-mailを書く必要性が考えられるからである。そのため、E-mailは本実践の中心である英語パラグラフ・ライティングとピア・フィードバックとは直接の関連はないものの、教育的観点から授業の一部として扱うこととした。

第15回授業においては、第1回授業と同様の方法で、「高校生は制服を着るべきか否か」という同じテーマでアーギュメントタイプエッセイを書かせ、これをポスト・テストとした。また、本授業においては、期末テストは行わず、代わりに学期末課題の提出を求めることから、その第1稿を提出させ、これに対してピア・フィードバックを行った。学期末課題は、その結果を元に修正を行ったものを最終原稿として提出させた。最後に、広島大学の教養教育課程において共通の授業評価アンケートとピア・フィードバックに関する自由記述のアンケートを行った。

3.4. 授業の概要

上述した通り、第2回授業から第5回授業までは、英語パラグラフ・ライティングの基礎とMicrosoft WordとGoogleの効果的な使い方などの指導を行った。その後の第6回授業から第13回授業までが本実践の中心である、Time OrderやCause and Effectなど種々のテーマごとの英語のパラグラフ・ライティングの指導であった。各授業の流れは、概ね次の通りである。

- (1) 単語テスト (5分)
- (2) 課題のピア・フィードバック (10分)
- (3) 教科書の答え合わせ (20分)
- (4) 教科書本文や当該テーマの英文を用いたアクティビティ (40分)
- (5) まとめと次回課題の説明 (15分)。

3.5. ピア・フィードバックの概要

表2が示す通り、第7回から8週間にわたり、宿題として、毎週ライティング・プロダクトの提出を求めた。ピア・フィードバックは、この課題に対して行った。各課題は、教科書の章末にあるトピックを採用した。それぞれ、前週において扱ったテーマに関するものである(例えば、第7回授業で提出される課題1のテーマは、第6回授業において扱ったTime Orderに関するものであった)。各課題の内容は表4に示す通りである。

ピア・フィードバックには、毎授業の冒頭10分程度を用いた。ピア・フィードバックにおいては、図1に示されるフィードバック用紙を準備し、その用紙の質問項目に回答していく形で学生同士のフィードバックを実施した。その際、第2回授業で指導したGoogleの検索テクニックなどを利用し、英語の文法性や表現の自然さ、妥当性についても確認し、フィードバックを行うように指導した。

表4 ピア・フィードバックの対象となるライティング課題の概要

	テーマ	トピック	単語数
課題 1	Time Order	My lucky day	120
課題 2	Space Order	My bedroom	120
課題 3	Process and Direction	My favorite dish	130
課題 4	Cause and Effect	Air pollution	130
課題 5	Examples	International foods in Japan	130
課題 6	Definition	Origami	130
課題 7	Classification	One's life goal varies from person to person	140-150
課題 8	Comparison and Contrast	Prius vs Insight	150

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらとも言えない	当てはまる	とても当てはまる
【主題文について】					
どの文が主題文なのかすぐにわかる	1	2	3	4	5
主題文の内容（大き過ぎず、小さ過ぎず）が適切である	1	2	3	4	5
【支持文について】					
支持文の階層構造が明確である	1	2	3	4	5
重要な支持文の内容が相互排他的である	1	2	3	4	5
【形式について】					
一行目のインデントが十分に取られている	1	2	3	4	5
一段落の構成となっている	1	2	3	4	5
両端揃え、フロント、フロントサイズの統一が取られている	1	2	3	4	5
カンマ、ビリオド、スペースなどの使い方が適切である	1	2	3	4	5
【英語について】					

図1 ピア・フィードバック用紙の内容

図1に示す通り、ピア・フィードバックにおいては、課題の主題文、支持文、形式について、5段階での評価を行った。また、英語の表現については、文法や単語の選択においてフィードバックを自由に記述するスペースを設けた。図2は、実際に学生が行ったピア・フィードバックの用紙の例である。

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらとも言いえない	当てはまる	とても当てはまる
どの文が主題文なのかすぐにわかる	1	2	3	4	5
主題文の内容(大き過ぎず、小さ過ぎず)が適切である	1	2	3	4	5
支持文の階層構造が明確である	1	2	3	4	5
重要な支持文の内容が相互排他的である	1	2	3	4	5
一行目のインデントが十分に取られている	1	2	3	4	5
段落の構成となっている	1	2	3	4	5
両端揃え、フォント、フォントサイズの統一が取られている	1	2	3	4	5
カンマ、ピリオド、スペースなどの使い方が適切である	1	2	3	4	5

Lt. "art work" という表現がとて 通マドと思ひます。
 Lt. "good health" という記述も なる間違ひはありませんが、その
 後ろでは平和記念公園について書かれています。平和の意味は
 peace、のほらが文脈が滑らかにならぬが、
 内容的に入邦の英作文とはほぼ同じなことを主張、理解しやすか
 なる。
 Lt. "The person ..." の前に、the number of を入れたら、
 decrease (に減りやすいと思ひます。the person という主語に
 decrease (を挿入しにくいと思ひます。

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらとも言いえない	当てはまる	とても当てはまる
どの文が主題文なのかすぐにわかる	1	2	3	4	5
主題文の内容(大き過ぎず、小さ過ぎず)が適切である	1	2	3	4	5
支持文の階層構造が明確である	1	2	3	4	5
重要な支持文の内容が相互排他的である	1	2	3	4	5
一行目のインデントが十分に取られている	1	2	3	4	5
段落の構成となっている	1	2	3	4	5
両端揃え、フォント、フォントサイズの統一が取られている	1	2	3	4	5
カンマ、ピリオド、スペースなどの使い方が適切である	1	2	3	4	5

内容がよくまとまっていると思ひます。特に最後の
 将来についておぼろげに、
 I saw them don't know ... の役は初見
 見ますか? 同座マドかどうかが進行できせん。

図2 受講生によるピア・フィードバックの例

4. 結果

4.1. ライティング・プロダクトの変化

本節では、実践の結果として、第1回授業時と第15回授業時における単語数の変化を示す。図3は、筆者が担当した4クラス全体の結果である。各クラス別の結果は、図4から図7に示す。これらの図は、横軸に第1回授業時の単語数、縦軸は第15回授業時の単語数を示す。対角線の左上にあるデータは、第1回授業時よりも第15回授業時において単語数が増えたことを示す。

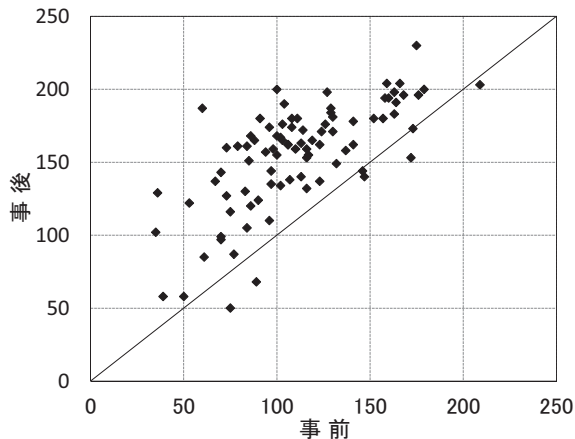


図3 第1回と第15回授業時のライティングにおける全クラスの単語数の変化 (N=103)

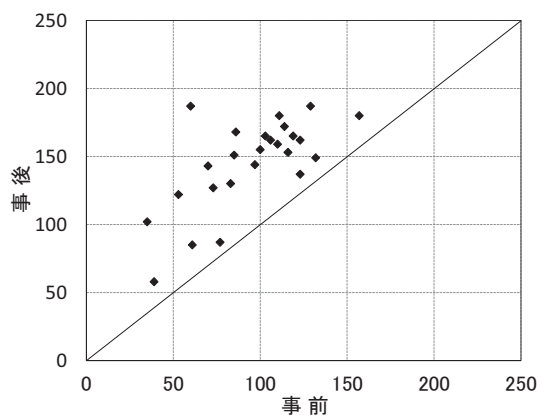


図4 第1回と第15回授業時のライティングにおける工学部の単語数の変化 (n=30)

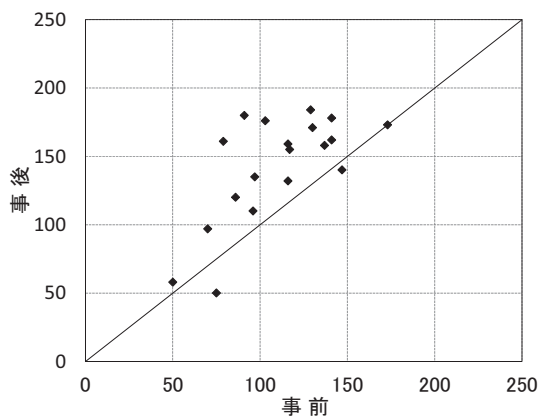


図5 第1回と第15回授業時のライティングにおける教育学部の単語数の変化 (n=26)

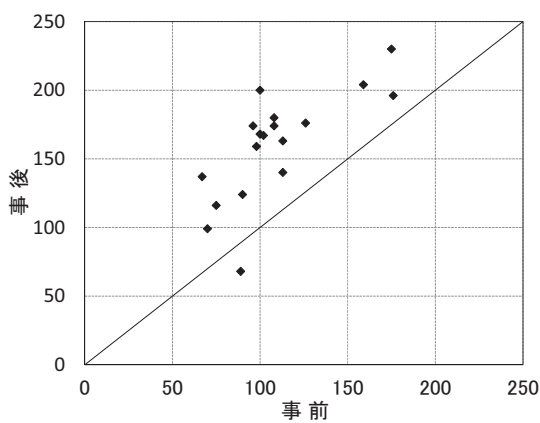


図6 第1回と第15回授業時のライティングにおける法学部の単語数の変化 (n=20)

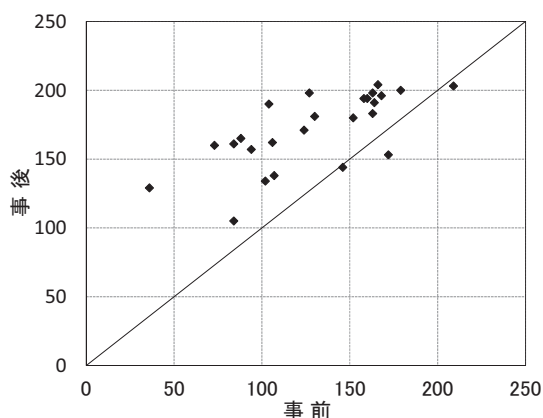


図7 第1回と第15回授業時のライティングにおける理学部・生物生産学部の単語数の変化 (n=27)

図3から図7が示す通り、本実践の結果、受講生の多くは30分間のエッセイ・ライティングにおける単語数が増加している。しかし、若干名は単語数の増加が見られず、寧ろ単語数が減少しており、ライティングの流暢性という観点からは、十分な効果が見られなかった可能性がある。

4.2. 授業評価アンケートの結果

本節では、本実践に対して受講生がどのような態度を有していたのかを確認するため、授業評価アンケートの結果を示す。広島大学の教養教育で実施している授業評価アンケートには、次に示す16の質問項目がある。

- Q1 あなたはどのくらいの割合で遅刻せずに授業に出席しましたか。
- Q2 あなたは真剣に授業に取り組みましたか。
- Q3 あなたは予習・復習にどの程度の時間を使いましたか。
- Q4 実施した授業は、シラバスに沿っていましたか。
- Q5 授業の難易度は適切でしたか。
- Q6 授業の進度は適切でしたか。
- Q7 教科書、参考書、補助教材、配布資料などは授業内容の理解に役立ちましたか。
- Q8 教員の説明はわかりやすかったですか。
- Q9 教員の授業に対する準備は十分でしたか。
- Q10 この授業を履修してよかったと思いますか。
- Q11 授業の方法や取り組みで良いと思ったことを書いてください。
- Q12 授業の方法や取り組みで、改善すべきと思ったことを書いてください。
- Q13 小テストや提出課題、授業内での指名などを通じ、学習したことのフィードバックや確認は多くなされていましたか。
- Q14 宿題や課題、予習などの量と内容は適切でしたか。
- Q15 教員は、授業が単調にならないよう、いろいろな工夫をしているように思いましたか。
- Q16 あなたはこの授業を受けて、この外国語の知識や技能が向上したと思いますか。

本稿では、本実践に特に関連が強い Q4, Q7, Q10, Q13, Q14, Q16 に焦点を絞り、工学部、教育学部、法学部、理学部・生物生産学部、の順に度数分布の結果を示す。

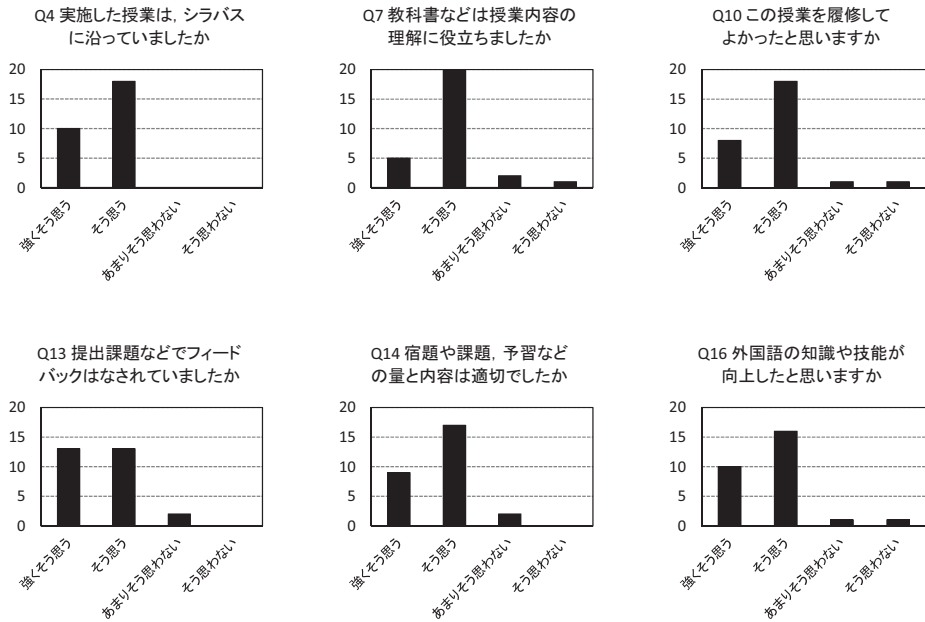


図8 工学部における授業評価アンケートの結果

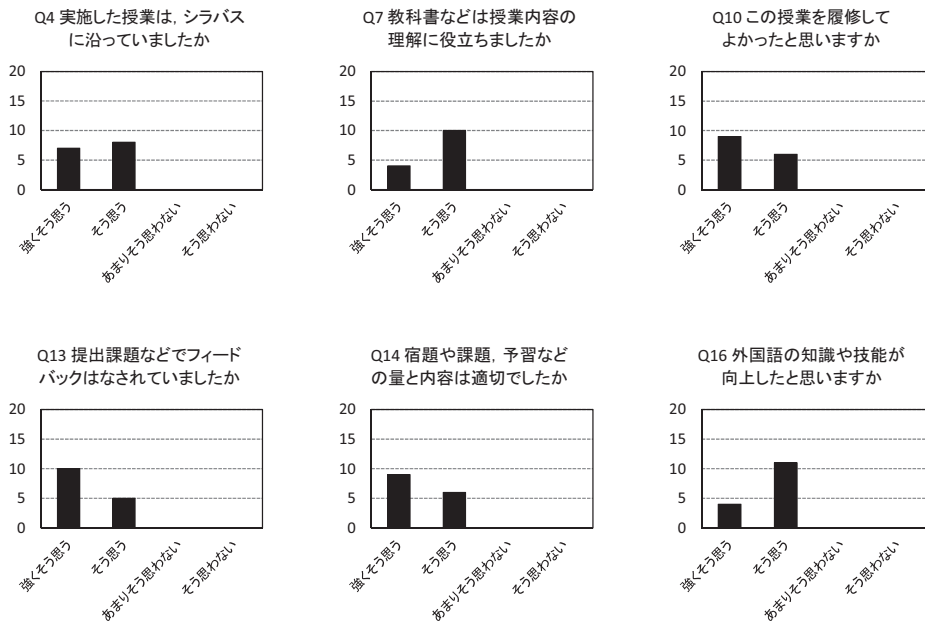


図9 教育学部における授業評価アンケートの結果

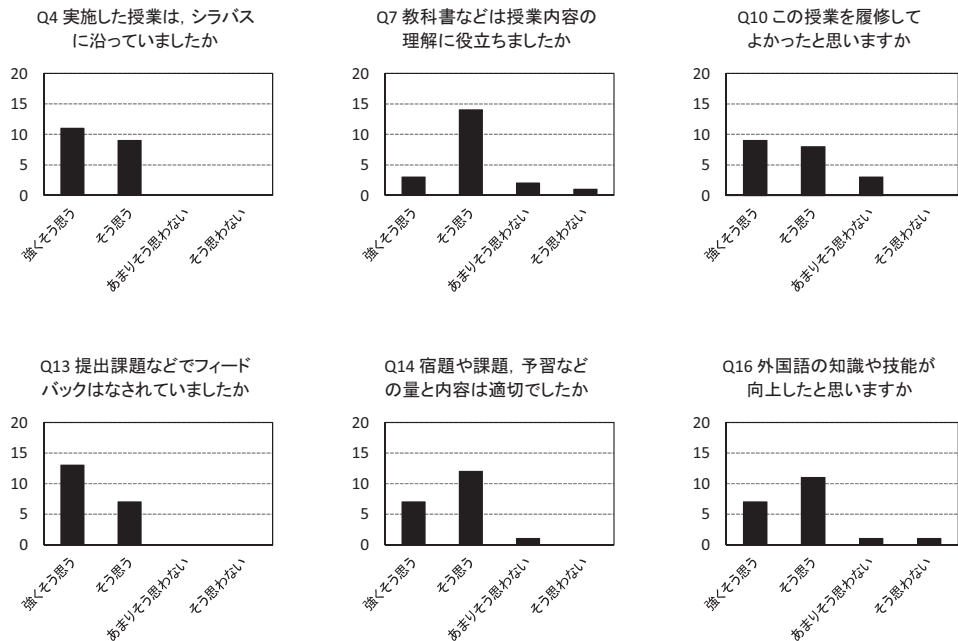


図10 法学部における授業評価アンケートの結果

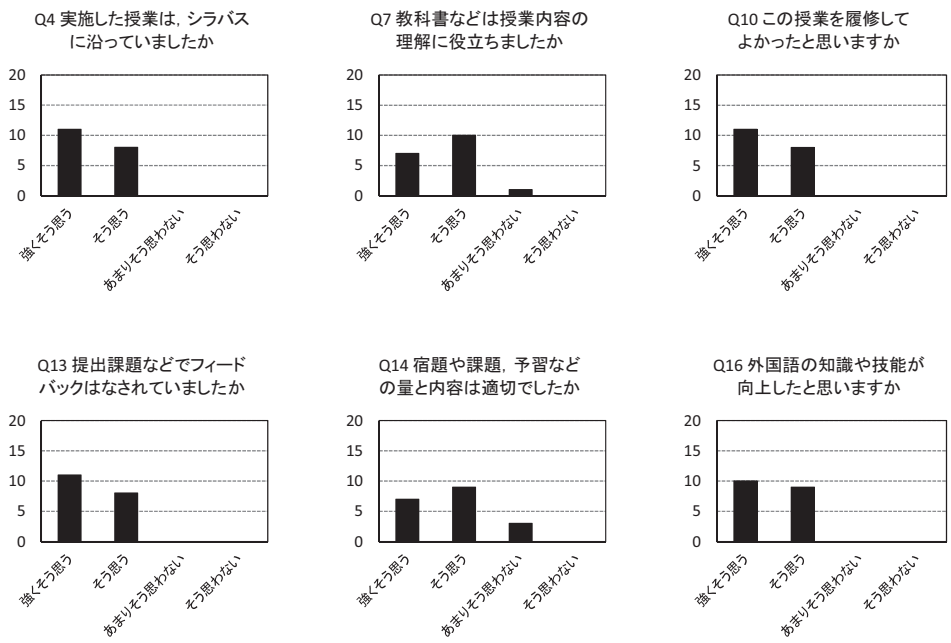


図11 理学部・生物生産学部における授業評価アンケートの結果

工学部，教育学部，法学部，理学部・生物生産学部のいずれの学部群においても，6つの質問項目全てにおいて，受講生は概ね「強くそう思う」と「そう思う」と回答している。しかし，一部の学生は「あまりそう思わない」や「そう思わない」と回答している。このように，本実践は多くの受講生にとっては概ねポジティブな結果であったが，一部にとってはややネガティブな結果となった。

4.3. 自由記述アンケートの結果

本節では，第15回授業において行ったピア・フィードバックについての自由記述アンケートの結果を示す。自由記述の分析においては，KH Coder version 2を用いた。自由記述アンケートにおいては，以下の2つの質問項目を設けた。

- (1) この授業で行ったピア・フィードバックについて，良かった点を自由に書いてください。
- (2) この授業で行ったピア・フィードバックについて，良くなかった（改善すべき）点を自由に書いてください。

まず，ピア・フィードバックの良かった点についての結果を示す。良かった点について，総語数2,781語，異なり語数380語の回答を得た。

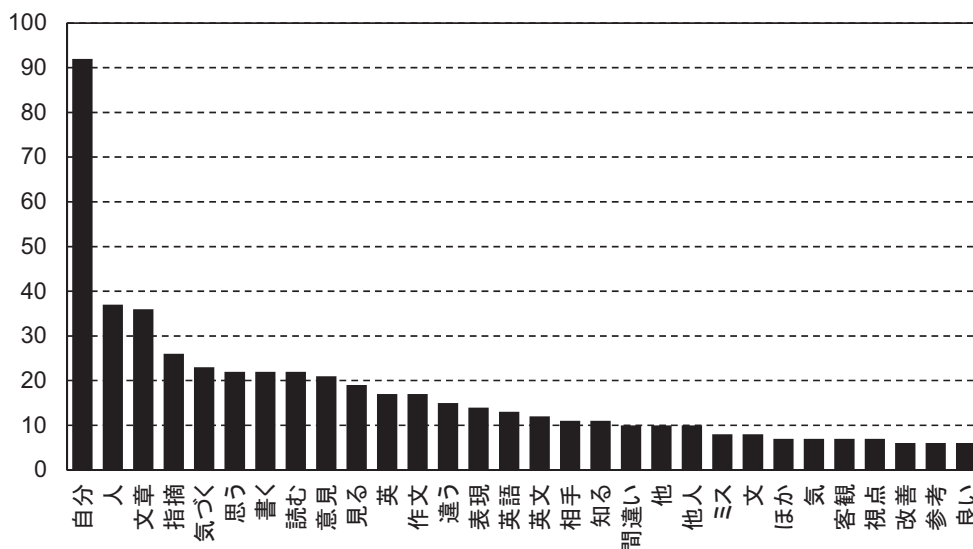


図12 ピア・フィードバックの良かった点についての自由記述回答に見られた上位30語の度数分布

図12の結果から，頻度の高かった語は，「自分」，「人」，「文章」，「指摘」，「気づく」などであった。これらの単語から，学生が自分の文章についての指摘をフィードバックの相手から受けることにより，様々な気づきが起こっていたことが伺える。これらの語がどのように共起するのかを分析するため，KH Coderに含まれる共起ネットワークの作成機能を用いて，ネットワーク図を描いた（図13）。

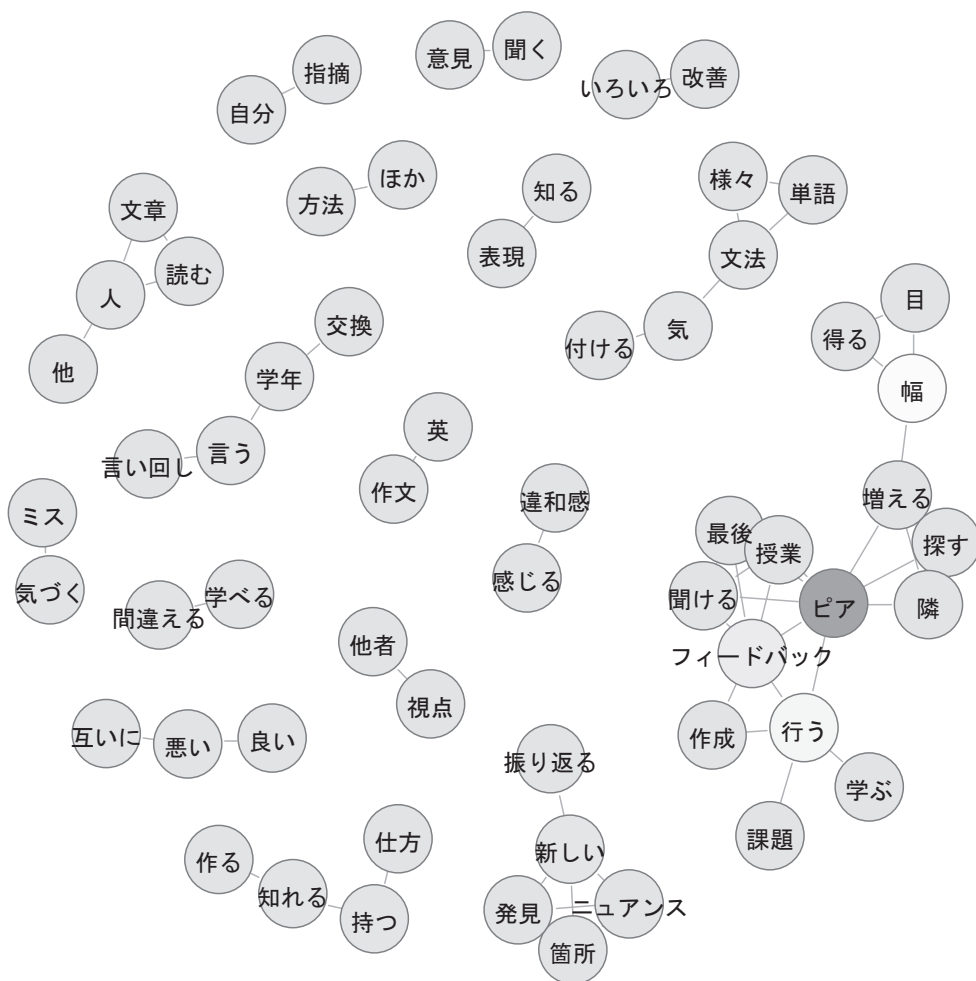


図13 ピア・フィードバックの良かった点についての自由記述回答から得られた単語のネットワーク図

共起ネットワークの図では、共起する頻度が高い単語同士が近くに配置される。図13の右側には、[ピア－フィードバック－行う－学ぶ]（実際の回答例：ピア・フィードバックを行うことで、隣の人の文章を読んだり、学ぶところや指摘点を探することで、自分の英語の知識も増えていったように思いました）などの共起が確認できる。この共起からは、受講生がピア・フィードバックを行うことにより、英語の知識に対して良い効果があると感じている様子が伺える。また、図13の下部では、[ニュアンス－新しい－発見]（実際の回答例：自分では気づかない間違っている箇所やニュアンスのおかしいところなどを指摘してもらえたので、新しい発見ができた）（原文のまま）などの共起が見られる。ここからは、他者からのフィードバックを得ることで、自分のライティング・プロダクトについて客観的に見直す視点を得ていることが伺える。また、図の右側上部には、[単語－様々な－文法]（実際の回答例：文法的誤りだけでなく、内容的なことや、単語はこれに変えたほうが良いなど、色々な指摘を受けて、自分の文章のくせが次第に分かるよう

になり、それに気を付けつつ書くことができるようになるなど、次につながるシステムだと思った)などの共起が見られる。これらの共起からは、ピア・フィードバックにおいて、語彙や文法など、英語面へのフィードバックを受けることに対して、受講生が好意的に感じていることが伺える。図13の左側には、「文章―読む―人―他」(実際の回答例:ほかの人に自分の書いた文章を読んでもらって評価してもらおうと刺激になるし、もっと頑張らないと、と思って集中して取り組むことができた)という共起が見られる。この共起からは、英語面以外にも、ピア・フィードバックの効果があったことが伺える。つまり、受講生同士で英文を読み合うことを前提として、ライティング課題を行うことから、読み手を意識したライティングができているものと解釈できる。また、「刺激になる」や「もっと頑張らないと」などの言葉からは、ピア・フィードバックが受講生の動機づけなどの情意面へも影響を与えていたことが示唆される。

このように、受講生は概ね、ピア・フィードバックを好意的に捉えているようである。自由記述の回答からは、ピア・フィードバックは、受講生の英語力の向上、ライティング・プロダクトの修正、受講生の情意面などにポジティブな影響があったことが示唆される。

次に、ピア・フィードバックの良くなかった点についての結果を示す。良くなかった点については、総語数1,889語、異なり語数415語の回答を得た。良くなかった点については、良かった点と比べ、総語数が少ない。これは、全体の16.67% ($n = 15$)の受講生が「特になし」のような回答をしていることが原因だと思われる。

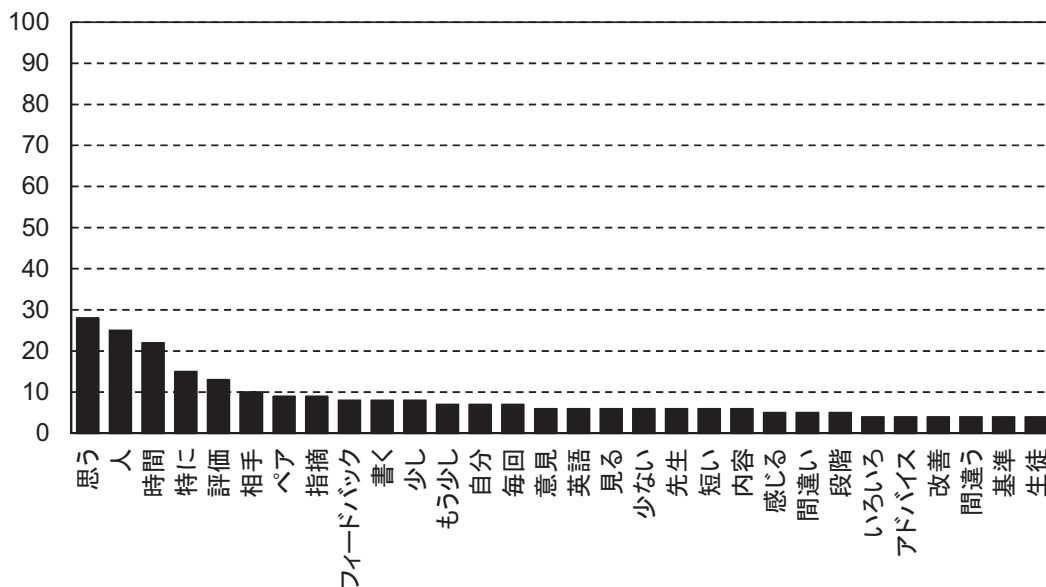


図14 ピア・フィードバックの良くなかった点についての自由記述回答に見られた上位30語の度数分布

図14の結果から、頻度の高かった語は、「思う」、「人」、「時間」、「特に」、「評価」などであった。ピア・フィードバックの良かった点と同様に、これらの語がどのように共起するのかを分析するため、KH Coderに含まれる共起ネットワークの作成機能を用いて、ネットワーク図を描いた(図15)。

践では、セメスターでペアを変更したのは3回だけであり、より多様な他者からフィードバックを受けたかったという受講者の願望が感じられる。また、その下には、[アドバイスー難しい]（実際の回答例：自分があまり英語ができないと相手にアドバイスをすることが難しいこと）という共起が見られる。本実践では、Google 検索を用いて、英語表現の確からしさを確認するという指導を行ったが、それでもなお、英語についてフィードバックを行うことは、学生にとっては難しいことが示唆される。最後に、図の中央には、[問題ー結構ー多い]（実際の回答例：相手が結構適当だとほぼ何も書かれないことも多く、そうなる自分も問題点が描きにくくなり、結局二人とも真っ白ということがある）（原文のまま）などの共起が見られる。この共起からは、ピア・フィードバックの成否は受講者一人では決まらない難しさが見て取れる。本実践においては、ピア・フィードバックを行う際はペアを基本とした。授業においては、ピア・フィードバック以外にも様々なペア活動を行い、できるだけペアで良い関係を築けるように配慮を行っていたものの、不十分な点もあったものと想定される。

このように、受講生の自由記述の回答からは、本実践で行ったピア・フィードバック活動の改善点が見て取れる。特に、時間配分やペアの多様性などは、すぐに改めることができることから、今後の実践において改善をすべき点であると考えられる。

5. おわりに

本稿は、筆者が担当するコミュニケーション IIA 授業における実践報告を行った。本授業では、英語パラグラフ・ライティングの習得を目的として、様々なテーマにおいてライティングを行い、ピア・フィードバックを用いて英文の推敲と校正を行った。結果として、受講生のライティングの流暢性は概ね高まり、授業評価アンケートの結果は概ねポジティブであった。また、ピア・フィードバックは、他者からの意見を受けることについて好意的である反面、いくつかの課題も示された。これらの結果をもとに、今後の授業実践をより改善していく必要がある。

注

- 1) 例えば、本実践で使用した教科書では e-mail やインターネットの発達により、遠方との意思疎通が飛躍的に早く便利になったことについてのパラグラフにおいて、Electronic technology has changed our lives in many ways. は主題文として内容が広すぎ、Electronic technology has made people expect replies sooner. は内容が狭すぎる例として示されており、Electronic technology has made communication quicker and less expensive. が適切な内容とされている。
- 2) 例えば、教科書の例としては、Vegetables are essential for good health. を主題文とするパラグラフにおいて、その内容を具体的に展開する支持文として、(1) アメリカ合衆国農務省の統計を引用する文、(2) ビタミンの豊富さを指摘する文、(3) ビタミン以外の栄養を指摘する文、の3文が特に重要であり、その他の支持文はその3文の下位に位置づけられるという階層構造を持つことが示されている。また、この3つの重要な支持文は、その内容において重なりが見られず、相互排他的である。

ABSTRACT

Peer Feedback for Effective L2 Paragraph Writing

Shusaku KIDA

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

This paper reports the results of ‘Communication IIA’ writing courses taught by the present author. The courses tried to foster students’ competence of paragraph writing in English by using peer feedback activities. In the first few weeks, students learned some basic rules concerning English paragraph writing, such as punctuation, topic sentences, supporting sentences, and concluding sentences. Then they learned how writing styles vary depending on topics. They learned one style each week and were assigned one-paragraph writing activity every week. In the next class, they engaged in the peer feedback activities in pairs. They were asked to rate the appropriateness of the target sentences and supporting sentences on a five-point scale. They were also asked to check the appropriateness of English usage, and were asked to make comments. The peer feedback activities lasted for eight weeks. The results of the courses were analyzed in terms of pre- and post- student writings administered at the second and 15th weeks, and students’ responses to questionnaires. The results showed that most students’ writing products improved, and their perceptions of the course were mostly positive.